

いもう 葦毛通信



ヒナノシャクジョウ

2021年11月15日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町3丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 116

1、2021年度の大規模植生回復作業を開始します！

葦毛湿原の大規模植生回復作業も2012年度(2013年1月)から開始し、今年で10年目になりました。今年度は11月16日(火)から作業を開始する予定で、作業は11月から2022年3月まで年末年始を除く毎週火曜日の9～12時、毎月第3日曜日の9～12時に行う予定です。

また、葦毛湿原と同様の植生回復作業を行っている愛知県指定天然記念物「豊橋のナガバノイシモチソウ自生地」では、11月から毎月第3火曜日の13～16時に作業を行う予定です。これ以外にも作業の進行状況を見ながら随時必要な作業を行う予定です。また、都合により日時を変更する場合がありますが、どちらの作業も公開しており、葦毛湿原では木道の上から、ナガバノイシモチソウ自生地はフェンスに囲まれているのでフェンス越しになりますが、自由に見学ができます。興味のある方は是非ご覧ください。

また、**葦毛湿原植生回復ボランティア**も募集しています。興味のある方は**豊橋市文化財センター**(0532-56-6060)までご連絡下さい。

今年の作業は昨年と同様に湿地中心部の遷移を部分的に後退させる**第3段階**の作業(葦毛通信 No. 32・73 参照)を行う予定です。



昨年の植生回復作業:ミズゴケ除去(2021年3月23日)

葦毛湿原は今年10月11日に国指定天然記念物になりました。植生回復作業を行うためには天然記念物の現状変更許可申請を行い、許可後に作業を行うことができます。これまでは、愛知県指定天然記念物だったので愛知県に申請を行っていましたが、今回から国に許可申請を行っています。国指定後に申請しましたので、許可までに今しばらく時間がかかります。許可されるまでは、豊橋市が独自に許可できる範囲内での作業を行う予定です。具体的には、外来種の駆除、木道の移動を予定しています。許可後に行う大規模な作業については、許可後に報告します。

2、2021 年度モニタリング報告ー6

葦毛湿原の駐車場は冬季も土日は満車になることが多くあります。それは、葦毛湿原の散策が目的ではなく、葦毛湿原を通して背後の山の中に通じる豊橋自然歩道が整備されており、絶好のハイキングルートになっているからです。春から秋の葦毛湿原の花のシーズンにも、湿原散策より山へのハイキングをする人たちを多く見ます。葦毛湿原を含めた豊橋市東部にある弓張山地は、豊橋駅から車で 30 分程度のところの市街地の近くにあり、市民の憩いの場になっています。

2021 年度も葦毛湿原の主たる開花期が終わろうとしています。冬季に開花するイワタカンアオイ、ヒメカンアオイ、ハンノキ等がありますが、どのような環境のところにあるのかを知っていないと見つけるのが難しい場合があります。

1) 湿原全体の開花状況

葦毛湿原ではホソバリンドウが咲いています。これで今シーズンの花の季節が終わります。今年も葦毛湿原では様々な花が咲きました。ヒメミミカキグサのように毎年同じところに咲く花や、ノハナショウブのように毎年咲く場所を変えていく花、カザグルマのように毎年順調に開花数を増やしている花、ミカワバイケイソウのように開花数が毎年大きく増減しながら全体としては増加している花、ホソバリンドウ、ウメバチソウ、ワレモコウのように開花はしても個体数が増えない花等様々な状況です。

2) 絶滅危惧種等の個別対応

葦毛湿原では絶滅危惧種や絶滅に瀕している植物に対して、個別に保護の対応を行っています。

ミカワシオガマは 2011 年までは発芽を確認していましたが開花はしていませんでした。2012 年以降は発芽も確認できなくなり、地上絶滅の状態です。大規模植生回復作業にあたって、かつて開花していた地点が分かっていたので、慎重に作業を行いましたが、残念ながら復活していません。ミカワシオガマは他の植物に寄生する半寄生の植物であると言われていたのですが、どの植物に寄生するのかもわかっていません。葦毛湿原で復活しないのは、種子の寿命が短く、埋土種子を形成しない種なのかもしれません。



ミカワシオガマ（愛知県絶滅危惧ⅠB類）
（1974 年 10 月 20 日、撮影：星野清治）

3) 人工授粉

葦毛湿原ではホソバリンドウ、ウメバチソウ、コオニユリに人工授粉を行っています。

ウメバチソウは絶滅寸前で人工授粉の成果は確認できませんが、ホソバリンドウは人工授粉を行えば30%程度は結実することが確認できています。ホソバリンドウはオシベとメシベの成熟時期がズレながら、下から順に開花していくことが分かっているので、人工授粉の回数を増やすことができれば、結実率が上がると思われます。毎日、人工授粉ができれば理想的ですが、難しいのが現実です。

コオニユリは今年初めて人工授粉を行いました。人工授粉すれば結実することは確認できましたので、人工授粉の回数を増やせば結実率が上がると思われます（葦毛通信 No. 115 参照）。



ホソバリンドウ（2021年10月28日）

4) I 地点実験区

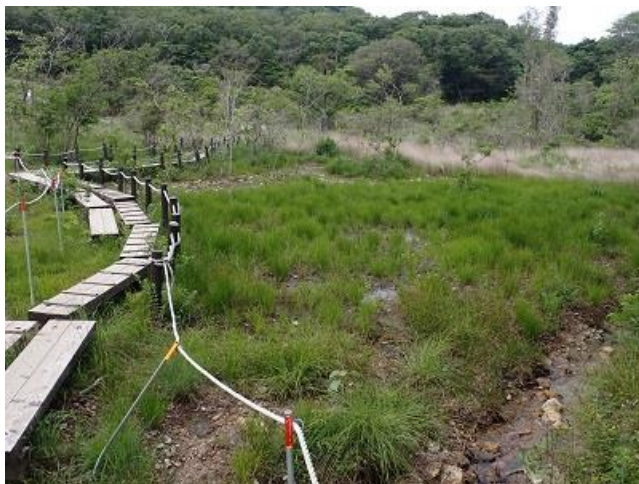
I 地点実験区は、作業の状況を葦毛通信 No. 108 で、補足を No. 110 で報告しました。その後、コシンジュガヤ、シラタマホシクサ等様々な湿生植物が発芽してきました。コシダの根の層を除去すれば地表面に水が流れる良好な湿地に再生することが分かったので、今年度は画面左奥の灌木部分にあるネザサの根の層を除去する予定です。



I 地点（2021年6月15日）

O 地点実験区

O 地点実験区は作業の状況を葦毛通信 No. 107 で報告しました。その後、除草しただけ



O 地点（2021年5月29日）



O 地点（2021年5月29日）

のところ（写真の画面右側）はイヌノハナヒゲが復活して昨年と同じように優勢な状況になりました。根まで除去したところ（写真の画面左側）はイヌノハナヒゲは発芽しましたが発芽1年目で小さな個体のみでした。

根まで除去したところは地表面に水が流れる湿地になり、トウカイコモウセンゴケ、ミミカキグサ、ミズギボウシ、シラタマホシクサ等の湿生植物が多く開花しました。10月でも地表面の礫が見られ、水が溜まっているのが観察できます。今年の作業では、昨年除草しただけの部分も根を除去して、イヌノハナヒゲを除去した状態を継続できるようにするつもりです。



○地点（2021年10月2日）

○地点（2021年10月2日）

3、ウメバチソウが復活しました！

ウメバチソウは、昨年はN地点の中央部で木道からは見えないところで1輪だけが開花しました。葦毛湿原でのウメバチソウの昨年の開花は、この1輪だけで絶滅寸前の状態でした。かつては、B地点の木道に近いところで60以上の花を咲かせていましたが、イノシシによる大規模な草刈後、開花しなくなっていました。そこで、テグスを張ってイノシシの侵入を防ぐ防御実験を2019年3月に行いました（葦毛通信No. 82参照）。

この実験以後、B地点のウメバチソウの復活を期待して観察を続けてきましたが発芽しませんでした。しかし、今年度やっと発芽・復活しました。作業後3年目になります。実験地の中には3輪が確認でき、K地点の1輪と合わせ、4輪開花しています。昨年は開花数が1輪だけだったので不可能でしたが、今年はウメバチソウの人工授粉を行いました。何とか絶滅の危機を脱して復活し、多くの花を咲かせてくれることを願っています。



B地点の実験地内のウメバチソウ（2021年11月10日）

ウメバチソウ拡大写真